2023 年 4 月 16 日 (日) 「主に帰れ ~ペルガモ教会に与えられた機会~」

ヨハネの黙示録 2:12-17

12 ペルガモンにある教会の天使に、こう書き送れ。『鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる。13 「私は、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかし、あなたは私の名をしっかり保ち、私の忠実な証人アンティパスが、サタンの住むあなたがたの所で殺されたときでさえ、私に対する信仰を棄てなかった。14 しかし、あなたに少しばかり言うべきことがある。あなたのところには、バラムの教えを奉ずる者がいる。バラムは、イスラエルの子らの前につまずきとなるものを置くようにバラクに教えた。それは、彼らに偶像に献げた肉を食べさせ、淫らなことを行わせるためであった。15 同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉ずる者たちがいる。16 それゆえ、悔い改めよ。さもなければ、私は直ちにあなたのところへ行って、私の口の剣で彼らと戦おう。17 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い小石を与えよう。その小石には、これを受ける者のほか誰も知らない新しい名が記されている。」』

【序論】

信仰の純潔を守ろうとするとき、目に見えない多くの戦いが伴います。様々な場面において、私たちは選択が迫られるでしょう。何が主の御心に適っているか、熟慮する時間が与えられることもあれば、瞬時に判断しなくてはならないこともあります。そのような判断をしていく上で大切なことは、「危機管理」的な視点をもって備えていることではないかと考えています。私がこのように考えるようになったのは、牧会の働きを通して学んできたことに基づいています。牧会の働きには、いくつかのレベルで対応しなくてはならない事柄があります。

- ① 急を要する働き(葬儀、急な相談や訪問、事故や怪我、災害への対応、病床洗礼…)
- ② 定期的な働き(礼拝、祈祷会、諸集会、役員会、総会…)
- ③ ある程度準備期間がある働き(結婚式、洗礼準備、転入会準備…)
- ④ 長期的に備えるべき働き(教理の学び、後継者や次世代の育成、世界の動向の把握…)

何事も心の備えが大切であり、完璧にはできなかったとしても、こういう状況になったらどう行動するかということを常に考えて生きている必要があります。そして、そのことを役員レベルでも、教会全体でも普段から話し合っているならば、実際に危機が訪れたときにそれを見極め適確な判断を下せる確率が上がるでしょう。このことは、個人の信仰生活においても言えることであり、日々御言葉から主の御心を聞き取って生きているとき、信仰に基づく判断が下せるに違いありません。

【本論】

今日は七つの教会の三番目、ペルガモの教会へのメッセージから学びます。

本論1.ペルガモという町について

まずペルガモという町について調べてまいりましょう。ペルガモは、前回のスミルナが港町であったのに対し、72km ほど内陸に入った所にありました。



今で言うトルコのベルガマに当たりますが、歴史的には紀元前 282 年にフィレタイロスがアレキサンダー大王の後継となり築き上げた「ペルガモ王国」が発端となっているようです。紀元前 133 年にこの町はローマに遺贈され、それ以後はローマの属州となりました。今でも大劇場やトラヤヌス神殿など、ローマ時代の歴史的建造物が多く残っているようです。その中でも特に有名なのは大図書館で、何と 20 万巻もの羊皮紙の文書が残されており、「ペルガモ」という町名は「羊皮紙」のギリシャ語「ペルガメーネー」から来ていると言われています。この町には、ゼウス神殿、アスクレピオス神殿など、ギリシャ神話の神々を祀る神殿が数多く立ち並び、アスクレピオスは「癒しの神」として蛇が象徴であったようです。そういえば、薬局のマークとして蛇が用いられているのを見たことが

ありますが、どうもこれの元になっているのがアスクレピオスだそ うで、医薬の神であるアポロンの子として崇められていたようです。



ペルガモの町のもう一つの特徴は、皇帝礼拝の中心地であったということ。紀元前29年にはローマ皇帝アウグストゥスに神殿がささげられ、更にその後も歴代の皇帝、トラヤヌス、セルヴスのために次々と神殿が建てられました。ペルガモ教会の信仰の戦いはここにあったようです。

本論2. 殉教者アンティパスの証

ペルガモンにある教会の天使に、こう書き送れ。『鋭い両刃の剣を持つ方が、こう言われる。「私は、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかし、あなたは私の名をしっかり保ち、私の忠実な証人アンティパスが、サタンの住むあなたがたの所で殺されたときでさえ、私に対する信仰を棄てなかった。(2:12-13)

まず、ペルガモ教会への称揚のことばが投げかけられます。「鋭い両刃の剣を持つ方」とは主イエスご自身を指し、この表現は審き主なるイエスの恐ろしい姿を描いています(両刃の剣とは、神のことば/最後の審判を指す)。「サタンの王座」と言われていますが、これはローマ皇帝の神殿を意味すると思われます。ここでは敢えて隠語が使われているのですが、それは当時明言することが危険だったからでしょう。「忠実な証人アンティパス」という人物の名前が出てきますが、黙示録で唯一出てくる殉教者の名前で、おそらく彼は皇帝礼拝を拒んだために殺害されたと思われます。「証人」ということばは「殉教者」とも訳すことができ、主イエスの証のために命を棄てた人を指します。アンティパスに関する辛い伝承が残されていますが、どうも彼は青銅の釜でジリジリと焼かれて死んだようで、これ以上にない苦痛とともに信仰の道を全うしたと伝えられています。歴史上多くの拷問器具が作られてきましたが、「ファラリスの雄牛」と呼ばれるものと類似しています。このような凄惨な死を遂げた教会指導者の姿を目の当たりにし、教会に属するすべての人は動揺したことでしょう。しかし、彼らはそれでも「信仰を棄てなかった」のです。

本論3. バラムの教え/ニコライ派の教えとの妥協

しかし、あなたに少しばかり言うべきことがある。あなたのところには、バラムの教えを奉ずる者がいる。バラムは、イスラエルの子らの前につまずきとなるものを置くようにバラクに教えた。それは、彼らに偶像に献げた肉を食べさせ、淫らなことを行わせるためであった。同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉ずる者たちがいる。 (2:14-15)

教会指導者の殉教を目の当たりにしても信仰に立ち続けたペルガモの信者たちでありましたが、彼らの中には一つの問題がありました。それは、異教(異端)との共存に甘んじる生き方が選択されつつあるということでした。ここでは「**バラムの教え**」と言われていますが、これがどういう教えであるかは明確には分かりません。そもそもバラムとは、旧約イスラエルがエジプトを出てカナンの地へ向かう途上、モアブの王バラクにイスラエルを呪ってくれと頼まれた預言者です(民数 22 章)。バラムはその依頼を斥けたものの、後にはイスラエ

ルの民をミデヤン人の女性と交流させることによって宗教的堕落へと導いたと言われています (民数 25:1-2、31:16)。ペルガモの異端者がバラムに譬えられているのは、本質的にその教えが真理に混ぜ物をする傾向があったからでしょう。具体的には「**偶像に献げた肉を食べさせ、淫らなことを行わせる**」と言われており、これらの行為は初代教会で禁じられていましたので(使徒 15:20,29)、それらによる腐敗が教会の内部を蝕み始めていたことが分かります。

教会内で不品行の問題が生じたとき、それを放置しておくと、いつの間にか教会を内側から破壊していく力を持っているので、気をつけなくてはなりません。もうずいぶん前の話になりますが、ある教会の青年会がそのような目的の集まりと化していると聞いて、衝撃を受けたことがありました。その腐敗が伝播し、教会全体(キリストのからだ)を深く傷つけていたのです。

ペルガモ教会の問題のポイントは、<u>この世と妥協し始めていた</u>ということ。偽りの教えに対して寛容であり続けたため、福音の真理そのものが失われ始めていたのです。これはペルガモの教会だけの問題ではありません。どの時代の教会にも、どの信者にも、何らかの意味で同じ轍を踏む危険性があると警告されているはずです。

本論4. 悔い改めという勝利

それゆえ、悔い改めよ。さもなければ、私は直ちにあなたのところへ行って、私の口の剣で彼らと戦おう。耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い小石を与えよう。その小石には、これを受ける者のほか誰も知らない新しい名が記されている。」』(2:16-17)

主イエスがペルガモ教会に求めておられることは「**悔い改め**」ですが、具体的には異端的な教えを排除することでしょう。不品行があるならば、教会の規程に基づく処置が必要になります。今日のメッセージの冒頭で述べさせていただきましたが、この種の問題への対応は「急を要する働き」に位置づけらます。しかし、解決には丁寧に取り組む必要があり、大きな労力と痛みが伴う。このような問題を未然に防ぐためにも、「長期的な働き」としての「教理の学び」は大切なのです。日頃から「不品行は避けて生きていなくてはならない」ということを、互いに戒め合い、励まし合っている必要があるからです。

「勝利を得る者」とは、真理に立ち返った者のことでしょう。信仰生活において、罪に陥ることは誰にでもあり得ることです。しかし、そこに留まり続けないこと、真理に立ち返ることが一人びとりに求められています。言い方を変えるならば、誰にでもやり直すチャンスが与えられているということです。

主イエスは、信仰に立ち返った人に「**隠されているマナ**」と「**白い小石**」を与えるという不 思議なことを言っておられます。「マナ」とは、エジプトを出た旧約イスラエルが荒野の 40 年の旅の中で食糧として主によって与えられた「天からのパン」(出 16 章)。これは「いの ちのパン」である主イエスご自身を表しているとも言われます(ヨハネ 6:35)。これが「**偶** **像に献げた肉**」と置き換えられる。キリスト者が本来食すべきものが取り戻されていくのです。また、「白い小石」とは当時ギリシャ世界で公的な宴会場に入るに当たって呈示するのに用いられた白い四角い石に象徴される、天国への入場券のことが言われているのでしょう。「白」は純潔を表し、主イエスの義を身に纏っていることが言い表されている。

「誰も知らない新しい名が記されている」とは、おそらく神の許に保管されている名簿に記されている信者の名前のことだと想像します(出32:32、黙示3:5)。

【結論】

今日の箇所から、私たちは「慰め」を見出すことができます。ペルガモの教会は宗教的堕落に陥り、中には公に罪を犯して教会に居られないほどになっていた人々もいたと思われます。しかし、このような人々にも悔い改めの機会が与えられていたことを知るからです。教会から離れていく人の気持ちをすべて知っているわけではありませんが、隠れたところで罪を犯している人はだんだん気持ち的に教会に行きにくくなってしまう傾向があります。罪を告白しない状態を我慢し続けていると、霊的に不健全になり、聖徒の交わりを避けるようになるのです。自分が汚れているように感じるからです。しかし、もしそのようなところで身動きが取れなくなっていたとしても、主イエスはあなたを待ち続けておられるということを思い出していただきたい。教会とは「慰めの共同体」です。主の赦しを実現していく群れであります。悔い改めがあるところには、主の栄光が現れるからです。そして、闇は光に変えられるのです。

【祈り】

光であられる神よ。世界を覆う闇は色濃く迫り来ています。そして、私たちの心の中にも、教会の中にも入り込んできます。しかもそれは、光の様相を呈していることが多いから、見分けがつきにくいのです。主よ、私たちに真理を見極める目を与えてください。また、闇に囚われたときは、そこから抜け出す力と勇気、悔い改めの心を与えてください。主イエスは誰も滅びることを願ってはおられず、ご自身に立ち帰ることを求めておられるからです。私たちが自分自身を吟味し、主の御前に純潔を保って生きられるよう導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

教会の霊性を見極め、適切なことばを投げかけ給う、父なる神の愛、 闇に囚われた者を光へと引き戻し、御許に帰らせ給う、主イエス・キリストの恵み、 勝利を得る者に「隠されたマナ」「白い小石」を与え給う、聖霊の親しき交わりが、 あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。